



子どものころはよく父に連れられて山に登った。

いつになったら山頂につくのか、今どの辺にいるのか。

父は休憩のたびに「今はこの辺で」と地図を広げて説明してくれたが、息を切らして痺れた頭の私にはなかなかよく分からない。

そしてまた「さて」と立ち上がって歩き出す父の背中に黙々と付いていくのだけれど、周りが自分の息と地面を踏みしめる音だけになって、ふと幼心にも「なぜ山に登っているのか」と訝しむこともあったりして。

山の気候は変わりやすい。

登山口に立った時に晴天でも、途中で雨に降られたり霧に包まれたり、尾根に出た時には雷に追われることもある。いきなり強い日差しにさらされて汗だくになることもある。

高い山になるほどその変化は目まぐるしく（安定しているときもある）、その都度レインジャケットを着たり脱いだり、これを楽しめるくらいでないと登山は相当に辛いものになる。

「なぜ山に登るのか」と聞くのは幼いことからなんとなく野暮な事なのだと、どこで覚えたのか分かっているつもりだったので、これまで父にも聞いたことはないし話したこともないのだけれど。

それを人生に例える話を聞くことは頻繁にある。

よくある話。

つまり人生山あり谷ありということで、楽あれば苦ありということだ。確かにそうだなと思う。

年を重ねて私もすっかり山好きになってしまった。

何が良いのか、一言で説明するのは難しい。例えば、風景が美しい（こともある）。山道ですれ違う人との出会いや会話が楽しい。

山頂で食べる飯はなぜか本当にうまい。

高い山になればなるほど、“平場（ひらば）”では出会うことのできない体験が待っている。

「そこに山があるから」という境地には私はたどり着けていないが、「そこに行けば何が待っているかも」という漠然とした期待に、山はいつも応えてくれた。

先日7月1日は富士山の山開きがあった。

標高3,776メートルの日本最高峰は5合目から登るのが定番だが、それでも往復距離8.5キロ（富士宮ルート）、所要時間10時間の長丁場だ。人生に例えるわけではないが急ぎ過ぎは事故の元。

時間を変えてルートを変えればまた違った景色を望むこともできる。

焦りは禁物だ。

自分とよく相談して歩を進めよう。

皆さんは今、何合目？